

無力という現実からの出発

同志社大学キリスト教文化センター准教授

森田 喜基

その後、イエスはガリラヤ湖、すなわちティベリアス湖の向こう岸に渡られた。大勢の群衆が後を追った。イエスが病人たちになさったしるしを見たからである。イエスは山に登り、弟子たちと一緒にそこにお座りになった。ユダヤ人の祭りである過越祭が近づいていた。イエスは目を上げ、大勢の群衆が御自分の方へ来るのを見て、フィリポに、「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか」と言われたが、こう言ったのはフィリポを試みるためであって、御自分では何をしようとしているか知っておられたのである。フィリポは、「めいめいが少しずつ食べるためにも、二百デナリオン分のパンでは足りないでしょう」と答えた。弟子の一人で、シモン・ペトロの兄弟アンデレが、イエスに言った。「ここに大麦のパン五つと魚二匹を持っている少年がいます。けれども、こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう。」イエスは、「人々を座らせなさい」と言われた。そこには草がたくさん生えていた。男たちはそこに座ったが、その数はおよそ五千人であった。さて、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えてから、座っている人々に分け与えられた。また、魚も同じようにして、欲しいだけ分け与えられた。人々が満腹したとき、イエスは弟子たちに、「少しも無駄にならないように、残ったパンの屑を集めなさい」と言われた。集めると、人々が五つの大麦パンを食べて、なお残ったパンの屑で、十二の籠がいっぱいになった。そこで、人々はイエスのなさったしるしを見て、「まさにこの人こそ、世に來られる預言者である」と言った。イエスは、人々が来て、自分を王にするために連れて行こうとしているのを知り、ひとりてまた山に退かれた。

(ヨハネによる福音書 6 章 1-15 節)

私たちは世界の現実を前に、しばしば無力さを覚えます。戦火は絶えず、SNS 上では差別的な言葉が溢れています。そのような現実の前に、少なくとも私はあまりに小さな存在です。私一人が祈り、行動したところで何になるのか、と諦めに似た思いに駆られることもあります。

1983 年、医師・中村哲さんは、パキスタンのハンセン病患者の治療を目的に「ペシャワール会」を設立し、翌年には現地のキリスト教系病院に着任しました。その後アフガニスタンで活動する中で、「医療だけでは人を救えない」と痛感し、2000 年には深刻な干ばつのただ中で井戸掘りを始めました。しかし掘った井戸が枯れてしまうことも多く、やがて「百の診療所より一つの用水路」との思いに至り、用水路建設に取り組みました。その働きによって荒れ果てた大地が再び緑を取り戻し、多くの人々が農地に帰ることができました。中村さんは 2019 年に凶弾に倒れましたが、その志は今も人々の中で生きています。

ヨハネによる福音書 6 章には、有名な「五千人の給食」という物語があります。大勢の群衆が集まったとき、弟子たちは「どうしてこれだけの人々に食べ物を与えられるだろうか」と途方に暮れました。私たちも同じように「自分には力がない」と思うことが少なくありません。

しかし、一人の少年が差し出した五つのパンと二匹の魚を、イエスは受け取り、祝福し、豊かに用いられました。私たちの持つものは小さくても、それをあるがままに差し出すとき、神はそれを祝福し、

多くの人を支える力へと変えてくださいます。

私も学生さんからの相談を受けることがあります。深い悩みや生きづらさに苦しむ声を前にして、励ましの言葉が見つからず、ただ寄り添うしかできない時があります。しかし祈りつつ、そばにいて、それこそがその時の私にできることであると気づかされます。

今学期、同志社大学ではミャンマーの地震被害や岩手県大船渡の森林火災に対する募金を行いました。それは微々たるものに見えるかもしれませんが。しかし一滴の水が集まって大河となるように、小さな祈りと行動が集まることで、やがて大きな流れを形づくりします。

聖書は語ります。神はあなたの小さな手を祝福し、それを通して働かれる方であると。苦しむ人々を覚えて祈り続けましょう。小さな一歩を献げましょう。その先に、神の平和が必ず訪れると信じつつ。